
剣鬼 - TURUGIONI -

マル丸円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣鬼 - TURUGIONI -

【Nコード】

N8341F

【作者名】

マル丸円

【あらすじ】

遠い昔確かに鬼はいた。妹と行った友人宅である神社の境内の裏に生えている巨大な大木。そこに突き立てられた剣が見える俺。抜かれた剣。倒れる大木。大木の下には少女が眠っていた。

鬼の眠り 1

雨が降っていた。とても冷たくて勢いが強いせいか痛く感じた。背中の地面は固く打ちつけられた雨が霧みたいになっていた。

体のところどころが冷たい。すでに手と足の感覚は失せ、考える力も無くなっていた。体の中で唯一熱い場所があった。腹だ。腹に突き立てられた剣が俺の肉を焼き湯気を出している。痛みは感じない。とうの昔に忘れてしまった。俺はここで待っていた。そろそろ500年になるだろうか。それともあのときから一分も経っていないのか。早く来てくれ。俺に突き立てられた剣を抜いてくれ。そうすれば俺はお前に命を捧げよう。この剣鬼としての人生の全てをお前のために燃やし尽くしてやろう。

「兄さん！」聞きなれた声が俺を眠りから覚ました。真っ先に見慣れた天井が眼につくかと思いきや、目をうつすらと開けると二つ年下の妹の顔が俺を覗きこんでいた。

「なんだ・・・？」妹はどういうわけかオレンジの晴れ着に真っ白なファーがついたマフラーを巻いて成人式みたいな恰好をしている。

「いつしよに初詣行こうって約束したじゃないですか！」ふくれっ面をして子供みたいに怒る妹の頭を撫でて落ち着かせる。そして枕の横にあるデジタル時計の日付をチェック。

「どおどお・・・妹よ、今日は12月31日であって1月1日ではない。よって初詣は成立しないわけだ」妹は訳がわからないという顔をしている。それを見てから毛布を頭まで一気に被る。

「よってお休み・・・」間髪入れずに毛布を引きはがされる。冬の空気はとても寒く、暖房など焚いていない俺の部屋で布団もかけずに寝巻でいるととても寒い。なのに妹は茹でダコみたいな顔して・・・

訂正。茹でダコみたいに顔面真っ赤で顔全体で怒気を現していた。

「すみませんねえ、兄さん。少し言葉を間違えてしまいました。二年参りです。二年参り！」そう言っただけの襟をつかむのをやめなさい。そして引きずるのもやめなさい。布団から落ちて痛いです。床はとても冷たいです！

「わかった！わかったからやめてくれ！今すぐ着替えて二年参り行こうな！」許しを請うと妹は手を離してわかればいいんですと小さく言うと、俺の部屋から出て行った。俺は立ち上がりベッドに戻る。そして端っこに丸まっている毛布を丁寧に広げ、また被・

「また寝ようなんて考えていないですよねえ」扉の外から妹の声がした。扉の向こうから殺気を感じて俺は逃げられないことを悟ると深い溜息を吐きだした。

鬼の眠り 2

善材寺。学校の友人宅。遠目から見れば普通の寺だが近くで見るとまるで幽霊が出そうな廃墟。というイメージしか湧いてこない、陰気な雰囲気のある寺だ。友人の親父であるこの住職は住職というより怖いヤクザにしか見えない。というか本業でヤクザ屋さん。寺なんか放置しているせいでこんなに廃れてしまったのだと友人が言っていたのを俺は覚えている。

「兄さん、唯が待っているんですけど早く歩いてください」人気の無い夜の道を神社に向けて歩いて時だらだと歩いている俺に向けて妹がピシヤリと言う。俺の頭は寝過ぎでまだ覚醒仕切っていない。唯とは妹の親友もとい俺の友人の妹だ。普段から怒っている妹とは違い、おしとやかでかわいい女子中学生だ。親父がヤクザだから俺には手を出す勇氣はない。というかあの娘はおしとやかな反面腹黒で普段から何を考えているのかわからない傾向がある。

「俺はあの寺に二年参り行くと思うと、来年は最悪な年なんだなと実感してしまうから出来れば家でゴロゴロしたい・・・」あの幽霊寺で年越しなんてとても嫌だ。そんなことを去年の大みそかにも言っていたことをかすかに覚えている。この流れは去年と一緒だな。確か去年は親父でありヤクザ屋でもある住職が組の人間を集めて大宴会をしていた。その時初めて友人がヤクザの息子だと知り、実はヤクザさんたちは強面なだけであまり怖くないことを知ったのだが、目が据わったのが気に入った。ただのタツパがあるからうちに来いだのちよつとチャカ撃つてみるだのドス構えてみるだのいいイロ紹介してやるだのと俺を非現実的に誘おうとしていることにとてつもない疲労感が出た。絡み上戸もいい加減にしてほしい。

「みんないい人じゃないですか。それにあの人たちと知り合いになつてからナンパや痴漢が全部なくなつたんですよ」にこやかに言う妹。だがそれは初耳だぞ。なんか怖いな。いつも陰からヤクザが妹

を警護でもしているのか？もしかしてうちの妹を極道の妻にでも仕立て上げようとしているのか？晒しを巻いて着物をはだけさして半か丁かやらせたいのか？

「・・・まあいい。うまい飯食えるからな」あまり深く考えるのは止めた。友人は俺の妹に少なからず興味がある様子だし、選ぶのは妹だ。いつまでもシスコンすることはないだろう。そうなると俺は極道の妻の兄貴・・・。ああやっぱり来るんじゃないか。想像も出来ない事を真剣に考えてしまう。

余計な事を考えたせいで知恵熱を持ってしまった頭を抱えながら歩いていると、きつい目つきの稲荷像と大きく手を振る我が友人。とその妹の姿が見えた。

鬼の眠り 3

俺達兄妹は、20畳はあるでかい和室に案内されると、家の中がとても静かなことに気づいた。

「おい明。今年はヤクザの皆さんはいないのか？」豪華な料理が並ぶテーブルに4人で腰掛けると、不思議に思っていたことを友人に聞く。

「ああ、今年は他の組と大宴会開くんだってよ。乱闘で死人出さなけりやいいけどなあ」軽い雰囲気ですらりと死人でなけりやいいなあなんて言える奴は俺の知り合いにはこいつとこいつの妹しかない。

「じゃあ今年は叔父さんの武勇伝聞けないんだね」隣に座った妹が残念そうに呟いた。そういえば去年は妹とその友唯は友人の親父のとなでも武勇伝に聞き入っていたな。たしかカチコミにきたブルドーザー3機を素手で破壊したとか、心臓に弾を受けて生き延びたとか……。本当ならギネスブックの超人部門に間違いなく乗りそうだ。

「父さんも楽しみにしてたんですよ。『今年は絶対あの兄弟をうち引き込む』って」うおい親父さん何い言ってるんだい。俺達はシノギ……。もとい一般人だから引き込むなんて言わないでくれ。というかそんな聞いたらネガティブになりそうな事をあっさりしゃべるな友人妹よ。俺はすでに注がれていたコップのウーロン茶を一口飲む。

「まああれだよ。録画してある去年の紅白でも見ながら年越しを待つんじゃないか」

「お兄ちゃん。去年のなんかみても、去年だけはやつたつまらないグループばかりで面白くも何ともありません。そんなもの見てるよりか兄さんが今すぐ切腹と言いながら箸をおなかにぶっ刺したほうが数100倍面白いので今すぐやっていただけませんか？」にこや

かに言う友人妹はともかわいいのだが内容が酷い。実の兄に向って吐く言葉ではないと思う。友人は妹に言われた言葉が相当悲しいようで凍っているし。うちの妹はあわわとかいいながら全身を震わせている。俺にしたってドン引きだ。だがそんな空気をすべてシカトし目の前にあるピザを一切れ取り、おいしーと頬を押さえる友人妹は年相応のかわいい女の子にしか見えないのもまた事実。この外見に何人の男が騙されたんだろうか？

まあしばらくするとそんな空気も無くなり、普通の忘年会をするこ
とが出来た。

用意した御馳走は全て平らげ、あとは新年を待つばかり。テレビでカウントダウンが始まっているのでそれを見ていると、友人が思い出したように語り始めた。

「そつえば言っ
てなかつたけど、この神社鬼が封印されているって伝説があるんだけど今から確かめに行ってみないか？」まったく友人はKYだ。そんなことを言ったら・・・。

「行きたいです!!」オカルト大好きっ娘であるわが妹が反応するに決まっているではないか。

そして今年の大みそかもろくな事がないなと確信してしまった。

鬼の眠り 4

「ここ。鬼が眠っている大木」午前0時。年が明けたというのに、俺は境内ではなく境内の裏にある中央に巨大な大木のあるただっぴろい空間にいた。

「はあーすごいですね！あのおつきな木ですか？」クリスマスノイルミネーション並にキラキラした目で大木の周りをクルクル回る我が妹。着物なんか着ているせいで江戸時代以外であそぶ子供みたいでなんか見ててなごむ。

「なんで御神木が裏にあるんだ？」御神木って普通は境内にあるものではないだろうか？

「言つたろ。鬼が封印されているから人が多く来る場所に置いとくのは危ないんだよ」

「ふうん。じゃあ暇つぶしにその伝説を語ってみろ」妹、sは大木を見ながらおおーとかでかあーとか騒いでいて、俺達は大木の前でそれを見守っている。まあ俺達はものすごく暇なので、伝説とやらを語ってもらおう。

我が友人は深呼吸をすると昔を懐かしむように語り出す。

500年前。歴史から排除された大事件があつた。

戦場に集まった兵士5万人が一夜にして肉塊になった。

通常の戦争じゃあり得ないこの惨劇の犯人は11体の鬼だった。

唯一生き残った男も腕を落とされ、目を片方くりぬかれた状態だった。その生き残った男が言うには、開戦とともに空から鬼が現れ、辺りを血に染めた。飛ぶ四肢。血の飛沫は激しすぎる勢いで霧となり、断末魔の叫びが絶えなかった。

その知らせを聞いた役人は、地方から名のある鬼斬りを5人呼び寄

せ、犯人である11体の鬼と鬼の子供2体を封印するように命をくだす。

5人の鬼斬りは瞬く間に10体の鬼を封印した。そして鬼斬りに脅威を感じた残りの3体のうち2体がこの地に身を隠した。だがそれも長くは続かず、2体はこの木に封印されてしまう。

「それで封印の時に使った剣が大木となっていてまだに鬼を永遠の牢獄に封じている・・・とまあこんな感じだが、楽しかったか？」

「・・・ありきたりな伝説だな。目新しさがない。5点」5万の兵士が死んだのに記録に残らないわけがない。それに鬼つてのが途方もなく強い人間だったとしても5万の兵士相手に11人で挑むなんて馬鹿にもほどがあるだろ。

「そんなことないってえーなっちゃん聞いたら喜び死にするよ？」
なっちゃんとはわが妹のあだ名。

「だいたいその話はまだ完結してないだろ？残りの一体はどうした？」そう。こいつの話じゃ鬼は全部で13体。一気に10体封印されてそのあとここに2体。じゃあ残りの一体はどうしたっていうんだ？

「耳ざといねえ〜そうだよ。ハッピーエンドじゃないからあえて言わなかつた」

「言え。完結しない話は嫌いだ」

「・・・鬼斬りの5人が突如バラバラの死体で発見された。一人は頭一人は右腕と胴一人は左腕一人は右足一人は腰と左足を残してあとは粉微塵のミンチでな。鬼斬りが持っていた刀が全て叩き折られていた。犯人はもちろん残った一体で、最後の鬼は鬼斬りの残った胴体を繋げて自分の体を作ったんだ。そして鬼はその身体を使って、毎夜毎夜封印された仲間を探しているってよ」伝説つてのはたいはい何か強い思いが込められて作られるものだ。だったらこの話には

終わらない復讐が込められているのだろう。終わらない復讐。それは俺が持つものだ。この話を聞いた俺には今ある復讐の念をさらに強く硬くするには十分だった。

「ふうん。じゃあここにもいつか来るのかもな・・復讐の続きに・・自分で言っていて少しおかしいと思った。鬼斬りを殺した時点で復讐は終わっているのに、なぜ俺は復讐は終わっていないと思うのだろうか？」

鬼の眠り 5

永遠の牢獄

あの男はこの場所をそう呼んでいた。

だが男は言った。

『永遠とは名ばかり。お前は500年後にはこの場所を出ることができるだろう。それまでの500年がお前に課せられた刑だ』

【妹】と共にこの地に来てすぐに鬼斬りと呼ばれる男たちが来た。

別の行動をとっていた10人の兄弟は急に消息を絶ち、兄の一人はどこかに行ってしまった。

鬼斬りに追い詰められた俺達はもう終わったと思った。だが鬼斬りは俺たちに向けた剣を収めたのだ。

『お前たちにはまだやることがある』男は訳のわからないことをいしながら、呪を唱え始めた。わけのわからないまま俺は封印をされ永遠の牢獄に幽閉された。

ひどい雨の中で時たま声が聞こえた。それは俺が封印されている場所の近くに人が来て遊びまわる音だ。音が聞こえるたびに封印が解かれるのかと期待はしたが何度も裏切られた。

また声が聞こえた。若い女2人と男が2人。男の方。そのひとりから何かを感じた。いままで声が聞こえても何も感じなかったのに男から何かを感じた。

『この・・・男なの・・・か？』封印をした鬼斬りが言っていた俺の罪を消し去る男。

『助けて・・・くれ・・・』

「ん？お前何か言ったか？」今だに大木の周りを探り回っている妹sを連れてそろそろ家に帰ろうかと提案しかけたとき、何かがある

えた。か細い声で助けを求めているように聞こえた。

「いや、いつてねえ」

「そうか。そろそろ家の中入ろうぜ。サブ過ぎる。新年早々さぶざぶと過ごすのは嫌だ」

「そうだな。じゃああいつら連れて早く家に入ろうぜ」そう言っ
て我が友人は一人で家に戻ってしまった。押し付けられたな。

諦めをこめて浅い溜息を吐くと、妹、sのいる大木に近づいていく。
『助けて……くれ……』ハツと顔をあげ周りを見渡す。さっきよ
りもはつきりと聞こえた。助けてくれと確かに誰かが言った。

「どこから……」

『どこから……』間違い無いこの男だ。この男が俺をここから出
してくれる。呼び続けよう。俺はお前を待っていたと……500年
も苦しんできたと……。

『俺は……ここにいる……俺はここにいる！』体を貫く剣が声を
小さくさせる。だが今だけは痛みを忘れよう。

『俺はここにいる！』聞こえた。若い女の声だ。

間違いなく目の前の大木から発せられている。まさかさっきの伝説、
本当なわけないだろ？

だが空耳と思いこもうにも聞こえてくるものはしょうがない。改め
て大木を眺める。

さっきまでなんの異変も無いはずだったのに、幹に刀が刺さってい
る。唾の無い脇差。柄も飾り気の無いただの木。だがそこから何か
を感じた。

本能が俺に抜けと言っている。

俺の脚は命令をしないうちに勝手に歩き始める。そして脇差の前
きた。手を前に出せば普通にとれる高さにある。

「兄さん？どうしたんですか？」妹が俺の隣に立って不思議そうに
俺の顔を眺める。

手を脇差に伸ばす。柄に指がかかるとしっかりと握る。

「ちよつと・・離れてる。唯も連れて・・」俺自身これから起こる
ことを知っている。封印された鬼が出てくる。

自分で馬鹿らしいとは思うが、こうなるはずなんだからしかたがな
い。

「ええと・・分かりました兄さんが言うなら・・」横目で妹と友人
妹が離れるのを確認すると一気に腕を引き、脇差を抜いた。

大木の上方を見る。傾いていた。

「えっ？」傾きはさらに酷くなっていく。足元に張り巡られた根は
持ちあがり、地面を割って行った。

擦れる葉の音。割れる地面の響き。妹、sの叫び声。いろんな音の
締めは大木が地面に倒れる音がした。低くでかい音。目と耳を完全
シャットアウトでも破壊力はすさまじく、しばらく耳鳴りが続く。

ゆっくりと目を開ける。

大木があつた場所には、グラビアアイドル顔負けの美少女が死んだ
ように眠っていた。

呆然と美少女を見つめる俺の耳に、はるか遠くから除夜の鐘の音が
聞こえる。

鬼の眠り 5 (後書き)

一話完です

あらすじの部分を細かくした感じになっています

一話を書き終えてから主人公の名前出すの忘れていたことに気付きました
まして少しあわてました・・・

読んでいて気付いた事などあればお知らせください

人物紹介

屁理屈だらけの主人公

片桐 義仁 カタギリ ヨシヒト

高二 男

めんどくさいと屁理屈を行使して逃げだそうとする極度のめんどくさがり。

逃げ出そうとするが最終的に逃げ出さないで割と矛盾している。

主義は頼まれたらまず断ること。

身長175センチ 体重57キロ 髪型は黒髪短髪のツンツン（襟足長め）

オカルトミステリー大好きな主人公妹

片桐 夏樹 カタギリ ナツキ

中二 女

よく見る番組は特番のUFO番組。大切なものは週刊オカルト。尊敬する人は阿部清明。

誰もが認める電波っ娘。だが家に帰れば兄を慕う結構なブラコン。義仁が素直になってくれるのを望む。

身長168センチ 髪型は焦げ茶ポニー（作者趣味）

未来の極道幹部

日下 明 ヒゲ アキラ

高二 男

テンション高めな正直バカキャラ。だがヤクザの息子だけあっていざというときは殺気丸出しの超コワイひとに変貌する。

義仁とは中一からの腐れ縁。

意外とオカルト好きで夏樹と話が合う。

身長176センチ 体重62キロ 髪型はオールバック（バックは

立ててる)

毒舌腹黒な友人妹

日下 唯 ヒゲ ユイ

中二女

普段は見せないが、親友の夏樹。その兄義仁。自分の兄明の前では兄、sに対して毒舌腹黒全開。

心にぐさつとくる。

身長155センチ 髪型は黒髪ボブカット

鬼

御神木に封印されていた少女の姿をした鬼。

兄弟が12人いる。

義仁が御神木に刺さっていた脇差を抜いたため封印が解けた。

一人称は俺。

身長162センチ 髪型はマジで長い黒髪(膝まである)

人物紹介（後書き）

一話人物紹介です

一部の主要キャラにもなってますので読んでくださる方がいれば確認をお願いします

鬼の契約 1

雨が降っていた。目は閉じること無く開いたままで、瞼の縁からあふれ出した雨が涙のように流れていく。

ほんの少し前まで、ここは戦場だった。領地をめぐる大名同士の争いに巻き込まれた自分の末路がこれだった。

右腕を肘から綺麗に斬られ、背中から腹に槍が3本突き抜け、馬の蹄が踏みつけた左手は潰れている。

それだけやられて、俺はまだしぶとく生きていた。

生きている意味がわからない。この状態の俺の生きている理由が分からない。

痛みのない熱を持っただけの痕を無理やり頭と目線を動かして見てみた。左手は、それが手だと分からない。右手は見えないだけでまだ腕がついているように思える。

ほんの数時間前まで元気に動いていた俺の体は、ただの死体に見えた。

だが俺は死んでいない。

死んでいない。

死んでいない。

何度も頭の中で呟く。

それは俺がまだ生きていたいと思っっているのと同義だった。

「死にたくない」

「死にたくない」

いつの間にか死にたくない、微かにしか動かない唇が呟く。

「死に・・・たく・・・な・・・い・・・」

最後に弱弱しく呟いた渴望を最後に唇は動かなくなり、閉じることの無かった瞼も閉じていた。

夢で感じた死への恐怖と生への渴望から覚めた気分は最悪だった。体中が汗まみれだ。夢で本当に安心してしまつて、低血圧な人特有の朝に弱く頭がボォーとするアレがない。

「そっか、明の家に泊つたんだっけ」横を見ると、妹と友人とその妹が川の字で雑魚寝していた。布団で寝たのは俺だけ。起き上がり昨日のプチ宴会の残骸からウーロン茶のペットボトルを引っ張り出すと、ラツパ飲みした。

飲んでいる途中、ふと部屋の隅に敷かれた布団に目が行く。そこにはよく出来た人形を思わせる白い肌と、相反する真っ黒な髪を持つ少女が眠っていた。

(そっか・・夢じゃないんだな・・)

昨日の夜、倒れた御神木の下から現れた少女を見たときは、意外にも驚かなかつた。そしてどういうわけか、みんなで家に運んで布団に寝かせた後はそれっきり。ただ静かに寝息を立てていただけだった。

鬼の契約 2

温かい。

それは何十年ぶりかの感覚だった。

今まで感じてきた死の闇ではない、温かく、安心できる闇が自分の
瞼に映っていた。

うつすらと開く瞼の間に、木目が綺麗な天井が日の光で輝いて見え
た。

「起きたか？」隣から男の人間の声がした。自分の封印を解いてく
れた人間。そして自分がこれから命をかけて使えるべき人間。

顔をゆつくりと傾けると、男の顔が見えた。どこか頼りなさげな男
だった。

不意に瞼から液体が溢れた。それが涙だとわかったときには止まら
なく、嗚咽を交えて大泣きになる。

温かい。それは500年もの間忘れていた感覚だった。それがこん
なにも自分を温かくさせるものだとは初めて知った。

「ひぐつ・・・ふつ・・・ひつ・・・」

まずい・・・非常にまずい・・・さっきまで俺の目の前でスヤスヤ
と眠っていた、少女が起きて俺の顔を見た瞬間に泣き始めてしまっ
た。当たり前のようにこんな経験がない俺はどう対処したらいいの
かわからない。俺の顔そんなに怖かったか？

「兄さん・・・？どうしたんで・・・っ！」後ろで妹が起きた。やば
い不味い・・・。

「どうしたんだよ義仁、朝からお盛んか・・・っ！」シヤレと言っ
たらほんとになつてたみたいな反応を止める。それは誤解だ。

「どうしたんですか夏樹兄、昨日の女の子を襲っ・・・てます

ね。いただきますですか？手を洗ってからたべるんですよ」「素直に現状を受け入れるな友人妹。

しばらく少女の嗚咽だけが和室に響く。なんとというか背中に突き刺さる視線が痛くて胃潰瘍にでもなってしまうそうだ・・・。

「兄さん！どういうことですか！！」とうとう痺れを切らした妹夏樹が、俺に怒鳴りつける。

「お前、それはいくらなんだってがつつき過ぎだろ！寝ている少女を襲うなんて鬼畜だ！！」

「あなたは鬼畜レイプ物エロゲーの主人公ですか？そうだと言ってみなさいこの鬼畜」馬鹿兄弟のせいで一番怒っているはずの妹が小さく見える・・・。

「いやっ、これは・・・」

「寝ているその子の体に何したんだ！鬼畜！」

「だから、その・・・」

「妹の目の前でやるなんて、なんとという大胆な！あなたはうちの兄ですか！？」

「……っ！！この糞兄妹！いいから黙って話を聞け！」一喝をすると『つまんねえ！』と『この程度で我慢ならないとは、情けない・・・』という返事を返しながら、馬鹿兄妹はおとなしくなる。だがまだ怒りのボルテージを下げない妹が肩をワナワナと震わせていた。

「夏樹、これは誤解だ。俺だって訳わかんねえんだよ・・・」今だ嗚咽を漏らす少女の肩を叩きながら、妹に弁解する。

「なっ？そうだろ？俺が泣かせたわけじゃないよな？」少女はヒグヒグ言いながら顔を上げ俺を見る。

「・・・そうなんですか？」妹が少女を睨みつける。

コクリ

弱弱しく頷く少女を見て俺は胸を撫で下ろした。

「「つまんねえ」」「馬鹿兄弟にはとりあえずさっき飲んでいた烏龍茶のペットボトルを投げつけておいた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8341f/>

剣鬼 - TURUGIONI -

2010年10月10日12時31分発行